

ある歌づくりの授業における「作詞ノート」の活用

—表現活動の教育方法に関する一考察—

Using "Words Notebook" in a Class of Song Production

-A Study about the Method in Expression Activity-

阿部 学

千葉大学大学院人文社会科学科博士後期課程

本論は、あるミュージシャンによる歌づくりの授業の中で活用された「作詞ノート」を取り上げ、その表現活動における教育方法的意義について論じたものである。授業を行ったのは、筆者が参加しているロックバンド「sjue」¹のメンバーである。「作詞ノート」とは、「sjue」のボーカリスト Sjue²のノートを称したものであり、その特徴は、常に携帯しておき、思いついたことは文でも絵でも何でも書き込んでおくことにある。この「作詞ノート」を子どもたちに配布した上で歌づくりの授業を行い、子どもたちの表現活動にどのような効果があったのかを考察した。授業を行った結果、自分の表現を振り返り新たな表現を模索するなど、子どもによって多様な効果がみられた。また、これら様々な効果をまとめた結果、日常の文脈にそくした表現活動を行うことの意義や、表現者の表現方法を考察していくことの重要性など、表現活動についての新たな視座が得られた。

キーワード：表現活動、歌づくり、作詞、発想法、イメージの共有、ミュージシャン

1. 研究の背景と目的

筆者はこれまで、学校教育において各教科・各単元の中で行われている様々な表現活動が、当の子どもたちにとって、真に必要とされるものとなっているのだろうか、という問題意識から、学校教育における望ましい表現活動のあり方を明らかにすることを課題としてきた。実際には、筆者自身が音楽活動を行っている³こともあり、ミュージシャンという表現の専門家と言える存在と歌づくり⁴の授業を行うことで、子どもたちがこれまでとは異なる仕方で、自分の思いを表現することができるのではないかと考え、授業を開発し、実施してきた⁵。

望ましい表現活動のあり方を論じるためには、いくつかの方法があるように思われる。たとえば、各教科・各単元で行われている授業を改善していく方法や、子どもたちの現状を分析した上で新しい授業を提案していく方法など、様々な方法が考えられる。

本論では、あるミュージシャンによる歌づくりの授業の中で活用された「作詞ノート」を中心的に取り上げ、その表現活動における教育方法的意義について論じる。具体的には、実際の授業の中で、「作詞ノート」が子どもたちの表現活動にどのような影響を与えたのかを捉えていく。

2. 本論で取り上げる授業について

2.1. 概要

本論が取り上げるのは、筆者が中心となり、2006年5月から7月にかけて、ある国立大学附属中学校3年「選択国語」の時間（全7時間）に行った、ミュージシャンによる歌づくりの授業である⁶。

本授業は、研究上の検証授業として実施したため、国語の時間に行ったことに大きな意味はない。ただし、選択の時間としての講座名は「シンガーソングライターになろう！」であり、子どもたちは、作詞など国語に関連した何かしらの方法で、歌をつくることを理解して受講している。

受講者は、男子5名、女子6名の計11名である。受講者の歌づくりに関わる技能は個人によって大きな差がある。自ら作詞・作曲・伴奏をこなす者もいれば、作曲はまったくできないという者もいる。

なお、歌づくりの授業を行ったのは、筆者がギタリストとして参加するロックバンド「sjue」⁷のメンバーのうち、作詞・作曲ができる4名である⁸。

歌づくりの進度は個人によって様々であったが、授業の大まかな流れは以下のとおりである。

<1時間目>「sjue」による教室ライブと歌づくりの方法の説明

<2-5時間目>主として歌づくり

<6 時間目> 主として発表へ向けた練習

<7 時間目> 発表会 (ライブ) ⁹

2.2. 問題意識

本授業は次の問題意識から実施した。

現代の子どもたちの人間関係を考察すると、仲間集団に過剰な配慮をする傾向や、その一方で仲間集団以外の他者には無関心である傾向がみられ、表現することに関して様々な問題があるということが分かる¹⁰。そこで、各教科・各単元の目標に縛られず、子どもたちがより自分の思い¹¹を表現できる場が必要なのではないかと考え、歌づくりを題材に授業を実施した¹²。

2.3. 活動内容

授業の内容は、子どもとミュージシャンがオリジナルの歌を共作するというものである。子どもたちは、ひとりにつきひとつ、オリジナルの歌を制作した。

授業において、ひとりひとつの歌をつくることにしたのは、仲間集団の中で自分の思いを表現することができないという状態を避けるためである。歌づくりの活動を行う場合、たとえば「学級歌をつくろう」というテーマの下、クラス全員でひとつの歌をつくることもできる。しかし、筆者がこれ以前に行った実践¹³では、グループで作詞活動を行うと、グループの中で積極的に歌詞を書く子どもと、ほとんど内容に関与しない子どもがいた。

また、とりあえず歌を完成させることが主たる目的となってしまう、「Aメロ」「サビ」などを分担して効率よく制作していたグループもあり、全体的に統一されず曖昧な内容の歌詞ができてしまうこともあった。

これらの例から、個人の思いを表現することが目標なのであれば、活動はグループではなく個人で行った方がよいと考えた。

子どもたちは主として、自分のことを詞で表現する活動を行った。作詞を中心としたのは、子どもたちにとって一定の授業時間内で曲まで制作するのは難しいことだろうと想定したためである。

ただし実際には、作詞を中心として歌をつくる方法を唯一の方法として行ったのではない。最終的に、自力で曲までつけた者や、曲のみのインストゥルメンタルのものを制作した者もいた。子どもたちの表現活動は多様であり、ミュージシャンはそれぞれに応じて、歌づくりを進めた。

2.4. ミュージシャンの関わり方

本授業に行くにあたっては、ミュージシャンが子どもたちにどのように関わればよいのか、という点が研究上の課題として挙げられた。そのため、ミュージシャンの関わり方について事前に考察を行った。授業の実際を理解しやすくするために、以下にその考察を記す。

「自分の思いを表現しよう」という活動を行う際、多くの場合、その活動は個人での活動に限定されがちであるが、そもそも自分ひとりで自分の気持ちに気付いたり、ある気持ちに確信を持ったりするのは難しいことである。人は誰かと会話するときなど、他者と交流する中で、普段意識することのなかった自分の気持ちに改めて気付くことが多いのではないだろうか。

たとえば、臨床心理士の諸富祥彦¹⁴は「人は、他者との関係の中ではじめて“自分自身”になれる」と述べ、カウンセリングの場面を考察している。諸富は、カウンセリングについて、「目に見えるレベルでは、カウンセラーとクライアントとの対話のようにしてカウンセリングは進んでいくのですけれど、そのプロセスが深まっていくにつれて (中略) クライアントのうちなる自分自身との対話に深まっていく」¹⁵ことが望ましいと指摘している。望ましいカウンセリングのあり方は、学派によって異なると考えられ、ここでは、結論を出せないが、少なくともこの指摘からは、人は他者との対話を通して、自分では普段意識することのなかった自分の思いに気付くことができるということを理解できる。

本授業では、この観点を踏まえ、基本的には子どもの個人作業という形態をとりながらも、実質はミュージシャンとの共同作業という形態で歌づくりを行うこととした。ミュージシャンは子どもの意図をうまく形にするという観点から助言を行った。ときには子どもの書いた詞について、細かく意図を聞くといったことも行った。そうすることにより、子どもは自分の気持ちについて改めて振り返ることができ、ミュージシャンはどんな曲をつくれればいいか、そのイメージを掴むことができると考えたためである。

ここで重要なのは、ミュージシャンが曲を提示する際に、その曲をつくった根拠を説明することである。子どもたちはそのミュージシャンの意図に対し、「その通りだ」と思ったり「自分の考えとは何か違う」と思ったりするだろう。そういった「自分はどう思ったか」ということを聞きながら、ミュージシャンが曲を吟味していくという過程を取り入れた。ミュージシャンは子どもの意見をできるだけ具体的に聞きだすことで、より納得してもらえる曲をつくることができ、子どもたちは、ミュージシャンとのやりとりの中で、自分がどう思ったかについて意識的になることができる。

その一方、ミュージシャンが積極的に関与しすぎて、子どもたちが表現できる余地を狭めてしまわないように留意しなければならない。ミュージシャンと子どもたちが関わる過程で、ミュージシャンが子どもの思いを解釈し、自分の意のままに歌をつくることも可能であるが、自分の思いを表現するという目標を達成し、「自分で表現できた、できなかった」という意識を持てるようになるためには、子どもたち自身が率先して歌づくりの

自分がどのように歌をつくっているのかということに関し無自覚である作曲家・ミュージシャンは多いと考えられる。

このふたつの例を作詞経験の乏しい子どもに当てはめることは難しい。発想を促す技術として「KJ法」を提唱した川喜田二郎²²は、「天才のインスピレーション的な発想では、必要な諸情報、そのつどははっきりと外に吐き出して定着させないで、頭の中に詰めこんだまま無理をして、次々にその累積効果をみずからの頭の中で試みているのだろうと思う。(中略)しかしその方法は、無駄や失敗が多く、なんども同じような感情的発想の不発弾を繰り返すことが多いことであろう。」と述べている。川喜田の発想法は「野外科学」によるものなので、作詞の際の発想法と同様であるとは言えないが、アイデアを思いつくという基本的な部分において、関連する部分はあると考えられる。そう考えると、阿久やボブ・ディランの例はここで言う「天才のインスピレーション的な発想」にあたると言える。阿久やボブ・ディランは、恐らく自分の作詞方法について、「無駄や失敗」が多いとは捉えていないだろう。しかし、作詞経験の乏しい子どもにとっては、「無駄や失敗」が多い方法であると言える。授業の中で、「いちばん最初に出てきた言葉を残して書き直さないようにしよう」「何も考えず自然に歌を浮かべてみよう」と指導しても、一部の作詞が得意な子どもは自分の思いを的確に表現することができるかもしれないが、多くの作詞経験の乏しい子どもにとっては具体的に参考になる情報は与えられないに等しい。また、結果としてミュージシャンが具体的に何も援助しないことにつながり、ミュージシャンと歌をつくる意義がなくなってしまう。

では、より具体的な方法を考察していこう。

<トム・e・ヨーク²³の例>

「言葉の断片をシルクハットに入れて、適当に取り出してつなぎ合わせた」²⁴

この例は、意図的に意味を考えずに、無作為に言葉をつなぎ合わせて詞にする方法である²⁵。

トム・e・ヨークは、すべての作詞をこの方法で行っているわけではなく、歌に「まるっきり感情がない」²⁶ようにみせるといった特別な意図を持った際、例外的にこの方法を用いた。

確かに、この方法で書かれた詞は、普通に読むと言葉のつながりに意味がないようにみえる。トム・e・ヨークが何を表現したかったのが分かりづらい。そもそも作詞の意図から考えれば、詞そのものから伝えたかったことはないように考えられる。自分の思いを表現しようとするとき、この方法を基本的な方法として子どもに伝えるには無理がある。

しかし、偶然に言葉が並んでできた文や詞全体から、聞き手が意味を想像したり、トム・e・ヨーク自身が意味を感じたりすることができるかもしれない。また、聞き手は歌に「まるっきり感情がない」というトム・e・ヨークの意図自体から、トム・e・ヨークの思いを読み取ることもできるかもしれない。

同様に、この方法で子どもが作詞を行った場合も、偶然に並んだ言葉から作者自身が意味を感じたり、聞き手が新たな意味を想像したりするなど、結果として作者自身が自分の思いが表現されたと感じるかもしれない。意図せずに選んだ言葉だからといって、自分の思いがまったく表現できないというわけではなく、この方法は必ずしも否定される方法ではない。自分の思いを表現するために最も効果的な方法だとは言えないが、場合によっては、こういったゲーム感覚で詞をつくることを取り入れることも可能である。具体的には、ひとつも言葉が浮かばない子どもが、アイデアを思いつくきっかけ作りとして行うことなどが考えられる。

続けて、他の傾向を持つ方法を考察していこう。

<ジョン・レノン²⁷の例>

(筆者注・「Strawberry Fields Forever」という歌に関して)「要するにリヴァプールについて何か書きたかったんだね。それで思いつくままに響きのいい名前を挙げていったんだ。ストロベリー・フィールズは、ぼくたちが住んでいた近所の場所の名前で、実際には救世軍の施設なんだけど、ストロベリー・フィールズをめぐるイメージをいろいろ見るわけなんだよね。」²⁸

<YUI²⁹の例>

「最初は、ノートにポエムみたいにして書いていました。それをいっぱい書きためて一冊のノートに収めたりして、気がつくと、日記みたいにならなかつたこととか考えたことを書いたりしていました。(中略)そして、ふだん詩を書いたりするときは、映画を見たときや曲を聞いたときなど何かのインスピレーションを受けたとき、思いついたことを書きとめたりしています。日々感じたこと・思ったことや考えたことは、いつも日記みたいにして書くようにしています。ふだん、なるべくいつもノートを持ち歩くようにしています。(中略)ノートを持っていなかったときは、携帯に打っておいたりとかもします。」³⁰

<Sjueの例>

「そのとき思っていることを紙に自由に書く。文書でも単語でも構わない。絵を描くこともある。少くく関係のないことでも構わず何でも書く。その紙に書かれた言葉を、ギターを弾いたりアカペラで歌ったりしながら、曲に合わせ自由に作り変えていく。」³¹

この3つの例において特筆すべき点は、いきなり詞を書き出すのではなく、事前にアイデアをたくさん挙げておく、という点である。ジョン・レノンはその故郷であるリヴァプールをテーマに歌をつくらうと思い、リヴァプールについて関連する名前を挙げ、「ストロベリー・フィールズ」という言葉が出て、それに関連するイメージをさらに考えている。YUIは、作詞のヒントになりそうな事柄について、普段からノートに書いたり携帯電話に打ち込んだりしている。作詞を行う際は、そのノートに書かれたことや携帯電話に打ち込まれたことを参考に、そこからイメージを膨らませたり、言葉をつなぎ合わせたりして詞をつくっていくことが予想される。また、直接ノートや携帯電話を見て参考にしなくとも、記録した時点で記憶に残っており、詞が書きやすくなっているとも考えられる。Sjueは、詞を書く際に、特に制限を与えずにそのとき思っていることを自由に書いている。書いたことをもとに、改めて自分の思いを整理し、詞をつくっていると考えられる。Sjueの例で特徴的なことは、「関係ないことでも構わず何でも書く」ことである。たとえ関係ないと思われることでも、先に挙げたトム・ヨークの例のように他の言葉を出す参考になる可能性がある。

これらの方法について、「ブレインストーミング」の例をたよりに考察する。川喜田は、先に挙げた著書『発想法』の中で「ブレインストーミング」を紹介している。川喜田³²は「ブレインストーミング」を行う際に重要なことを数点挙げており、その中には、「自己規制をするな」という点と「できるだけ多量のアイデアを出せ」という点がある。ここで挙げられている「ブレインストーミング」は、複数人による会議の場で活用するものであると紹介されているが、先の2点は個人でよりよい発想をするためにも参考になる点だと考えられる。Sjueの例で特徴的な「関係ないことでも構わず何でも書く」という方法は、この2点と関連しており、作詞をする際にも有効な方法であると考えられる³³。

また、作詞に使われなかった「関係のないこと」を出すことは無駄な作業ではない。川喜田³⁴は「KJ法」の説明の中で、最終的に「包括性」を獲得することを目的としており、途中で「没落」するヒントがあるが、それは個々のヒントの「干渉作用」が進展しなかったためである、と述べている。これを作詞に置き換えて考える。作詞では、最終的により自分の思いが表現された詞を制作することが目的であり、そのためには個々のアイデアがよりよい形で結びついている、すなわち「包括性」を獲得する必要がある。そのためには、個々のアイデア、ヒントがうまく結びつかない、すなわち「干渉作用」が進展しない場合があるかもしれない。その場合、よりよい詞を求めてさらに吟味していく作業が行われる。単に

体裁を整えるために言葉を選ぶのではなく、たくさんの言葉を出しておいて、その中から自分の思いを的確に表しているものや詞の形式で表せそうなものをじっくりと吟味して行く過程を取り入れることが重要である。このように、最終的に詞に反映されなかったアイデアでも、よりよい詞を制作するための重要な役割を任っているといえる。

前述のとおり、筆者はこれまでも何度か歌づくりの実践³⁵を行っているが、これまでは、このような作文でいう下書きに相当するものを明確に制作せずいきなり詞を書き始めさせていた。子どもたちは頭の中で考えたり、言葉を書き換えたりしながら自分なりに下書きに相当する部分を補おうとしていたとも考えられるが、作詞の専門家に比べ語彙も少なく経験も浅い子どもたちにとっては、初めから整った詞を書こうとすることは難しく、具体的に参考にできる下書きが用意されていた方が作詞はしやすい。作詞をする際には用いる言葉を吟味していくという過程が重要であり、そのための材料として、こういった下書きに相当するものを作成する過程を取り入れることは有効である。また語彙が少なく言葉が浮かばないといった子どもも多いと考えられる。そういった場合にも、あらかじめたくさんの言葉を出しておくことで詞を考えやすくなると考えられる。

この点には、次のような批判が予想される。すなわち、子どもたちがその場で感じたことをそのまま素直に表現したものこそ、自分の思いなのではないか、という批判である。

もちろん、子どもたちがその場で感じたことをそのまま素直に表現したものの方が、何度も推敲を重ねたものよりも、的確に自分の思いを表現できている場合はあるだろう。しかし、前述のとおり、子どもたちの人間関係を考察すると、仲間集団へ過剰な配慮をしまい、積極的に自分を表現したがる傾向や、仲間集団以外の他者へ無関心な態度を装う傾向がみられる。そういった中では、自分の思いが消極的・短絡的なものになっていかを、繰り返し反省し、自覚する過程が必要である。特に、本授業はそういった傾向が強い中学生段階で行うこともあり、自分の表現を反省する過程の必要性は強い。

以上のような考察をした上で、子どもたちにひとり一冊「作詞ノート」を配り、授業で活用することにした³⁶。子どもたちが「作詞ノート」を常に携帯することで、詞のアイデアをたくさん出しておくことができ、また、それを記録しておくことができると考えたためである。

4. 授業における示唆的な場面とその場面についての考察

実際の授業では、1時間目に、Sjueの「作詞ノート」を子どもたちに見せ、それを参考に、自分たちが日頃感

じたことについて、文でも言葉でも絵でも何でもいいので書いておくようにと指示をした。また、その「作詞ノート」に書かれていることをもとに、話をしながら歌をつくっていかうと呼びかけた。

授業全体を通して、「作詞ノート」が、単に表現を深めるという効果を生み出すに留まらず、期待した効果以外の効果もみられ、ミュージシャンと子どもたちとの関わりを中心を担っていたと考えられた。以下、授業における、「作詞ノート」の活用に関わる示唆的な場面を挙げながら、「作詞ノート」の教育方法的意義について考察していく。

4.1. 「作詞ノート」が話すきっかけになった

授業全体を通して、「作詞ノート」があることで、ミュージシャンが子どもたちと接しやすくなったと言える。

ミュージシャンは当然のことながら教員ではなく、必ずしも子どもたちと接するのが得意だとは言えない。個人差はあれど、出会って間もない子どもたちと、いきなりうまくやりとりをするのは難しい。実際、1時間目のはじめに、「sjue」が教室でライブを行ったが、そのときの演奏やMCは「sjue」にとっては満足できるものではなかった。それは、普段とは異なる場で、普段とは異なる相手に対してライブを行ったことによると考えられる。このように、授業という特殊な場の中で、ミュージシャンが自分らしく振る舞えない場面がみられた。

また、子どもの側からしても、大して話をしていない人に自分の思いを簡単に打ち明けることは容易ではないだろう。

しかし、本授業では、「作詞ノート」があったことで、ミュージシャンと子どもたちの話すきっかけをつくることができた。まだほとんど話をしたことがない仲でも、「ノート見せて」、「何か書いた?」など、「作詞ノート」をきっかけに話を切り出す様子がみられた。たとえ何も書いていなくても、「何で何も書いてないの?」と会話を切り出し、思いを探っていくことができた。

また、「作詞ノート」を個人の所有物としたため、話をしたい子どもと直接関わることができたという面もある。「sjue」メンバーの中で、子どもたちと話すのが苦手な者でも、話をそらすことなく、歌づくりの話に集中できていた。

授業の冒頭以外でも、「作詞ノート」を中心に歌づくりが進められた。つくっている最中の歌に関して、「どこまでできているか」「どんなことを踏まえているのか」といったことを理解するために、ミュージシャンは常に「作詞ノート」を確認しながら話をしていた。大切だと思われることは必ず「作詞ノート」に書かれているからである。

こういった子どもたちと接するための手がかりがあ

ったことは、学校現場になれていないミュージシャンにとって、有効に働いたと言える。また、「作詞ノート」があったことで、子どもたちと話をしやすくなり、結果として、本授業で重視した「イメージの共有」がしやすくなったと考えることもできる。

4.2. 歌づくりの方法の説明に役立った

前述のとおり、ミュージシャンは教員ではないため、1時間目に行った、歌づくりの方法を説明する場面で手間取った。

歌づくりの方法の説明としては、はじめに、ライブ中のMCの中で、演奏した歌と関連させながら Sjue が説明した。Sjue は熱心に語ったのだが、その内容は、「今、こうやってうたってても、(自分の気持ちがその都度)色々変わってくんだと思った」「つくった後に、時間の流れに名前をつけて、できた(歌)」など抽象的な内容が多く、子どもたちがそれらを理解できたかは疑問であった。

加えて、ライブ後、実際に Sjue の「作詞ノート」を配り、再度説明を加えた。Sjue は、時折、「作詞ノート」の特定の部分を見るよう指示し、その部分からできた歌についてのエピソードを交え、できるだけ具体的に話そうとした。Sjue のノートには思ったことの他に浮かんだ絵なども自由に書いてあり、子どもたちは興味を持ちながら話を聞いていたと思われる。授業後の感想にも、一部「作詞ノート」に関する記述がみられた。

この場面では、子どもたちは Sjue の話を実際の「作詞ノート」にそくして理解することができ、具体的に歌づくりの方法をイメージできたと思われる。また、今後このように「作詞ノート」に色々書いていくという、実際の作業について理解できたとも思われる。

Sjue に限らず、多くのミュージシャンは、普段自分がどのように歌をつくっているのかということ、誰かに分かりやすく教える経験はないだろう。そのときに、「作詞ノート」のような具体物があると、子どもたちのイメージを喚起しやすいと考えられる。歌づくりのような、形のない抽象的な活動であれば、なおさら具体物の有効性は高まるだろう³⁷。

4.3. 女子Aについて

ここからは、示唆的なやりとりがみられた子どもたちを取り上げていく。

はじめに、女子Aについて取り上げる。女子Aは、自分で作詞・作曲・伴奏までこなすことができる。はじめて「sjue」メンバーが「作詞ノート」をみた2時間目に、周りにいた他の女子が恥ずかしがっている中、率先して手を挙げて Sjue を呼ぶなど、歌づくりに積極的に臨んでいた。

女子Aは、「作詞ノート」に普段感じたことではなく、

既に自分が完成させていた歌を何作か清書してきていた。自分が歌づくりを得意としていることを、好感を持っている Sjue に見てもらいたかったのだろう³⁸。

このとき Sjue は、女子 A の詞を見て、「すごいね、君ミュージシャンになれるよ」と素直に褒めながらも、女子 A の詞に、Sjue 曰く「詞っぽい言葉」が多いことを感じている³⁹。すなわち、同じく Sjue の言葉を借りれば、「よくありがちな詞を真似て、詞の形を整えることに気を遣いすぎている」と感じたということである。

そのような詞を書くことは、特に中学生ではよくあることだが、本授業では、ありがちな詞を真似ることに安住せず、より自分の気持ちにあった言葉を探っていくってほしいという願いがあった。そのため、Sjue は、女子 A 自身が一番自分の気持ちがよく表現できているという詞について、ひとつひとつ言葉の意味を細かく聞いていった。女子 A は、その問いかけにうまく答えられず、ひとつひとつの言葉に強い思い入れがないことを自覚した。女子 A は「もっと気持ちに素直な詞が書けるかもしれない」と発言し、Sjue と合意のもと、その歌を改良していくことにした。

しかし、この後、女子 A はなかなか改良した詞が書けず、苦勞した。授業時間に別の詞を書き出し、そちらを完成させることもあった。

女子 A に変化がみられたのは 4 時間目からである。それまで、女子 A の「作詞ノート」には清書したものしか書かれていなかったが、4 時間目からは、書いた詞について、納得のいかない言葉を黒く塗りつぶしたり、アイデアを端の方に書いておいたり、「作詞ノート」を「汚く」使うようになっていった。このように「汚く」使われた「作詞ノート」は、Sjue の「作詞ノート」のように、様々なアイデアが規制されることなく大量に出されている状態にあると言える。それまでの女子 A にとっては、「詞っぽい言葉」を奇麗に清書して書くことが自己の満足につながっていて、そのことが表現の幅を狭めてしまっていたと考えられるが、それを捨て、新たな表現を苦心しながら探っている様子が理解される。このとき Sjue は、女子 A にとっては簡単に歌を仕上げることよりも、苦心して新たな表現を探ることの方が必要だと判断し、具体的な助言は行わず、継続して「作詞ノート」に向かわせた。

これは、常に特定の「作詞ノート」を携帯させていたことに起因するところが大きいと考えられる。決まった「作詞ノート」を常に携帯することで、子どもたちには常に自分の表現と向き合う場が用意されていることになる。「作詞ノート」を開いたときに、常に書きかけの詞について考えることになる。このように、継続してひとつの表現に向かい合う場面を設定することで、簡単に仕上がる表現を越えていくきっかけになることがあると確認できた。

4.4. 女子 B について

女子 B は、2 時間目には、「作詞ノート」に日頃感じたことをそのまま書いてきていた。中学校最後の運動会があったこともあり、「運動会優勝したぞー！！」「青春の 1 ページ、今を大切に」など運動会に関連した記述が多かった。その日の感想用紙には「うんどうかいについてかく」と書かれていた。女子 B と関わった Sjue は「後で抜粋すると思って、もっと死ぬほど書いてみて」とだけ指示していた。

ところが、3 時間目には、運動会の記述はほとんど見られなかった。前時以降の分の、はじめの 2 ページまでには運動会のことが書かれているが、それ以降は新たに好きな人ができたことについて書かれていた。ノートの約半分にあたる 14 ページにわたって、行を飛ばさず、一行ずつ丁寧に書かれており、日記のような文体でありながらも、ところどころが好きな人へのメッセージとなっていた。好きな人ができたという内容そのものが気持ちを盛り上げるものであるが、自分が好きになったきっかけや、今の相手への気持ちなどが細かく豊かに書かれており、授業で使うためという消極的な理由でなく、積極的に「作詞ノート」に書いていた様子が目に浮かぶ。Sjue は驚き、「ありがとね。」「気持ちいっぱいだったでしょ。」と、「作詞ノート」にたくさんの分量を書いたことへの感謝を伝えた。

女子 B は、Sjue からの「作詞ノート」にたくさんのことを書くという指示を素直に実行し、思いがけずたくさんの分量を書くに至った。Sjue は授業後、女子 B が「たくさんのことを書こうとしているうちに、新しい気持ちに気付いて、たくさん書いた。」と発言したことを紹介している。継続してたくさんのことを書き続けることで、新たな気持ちに気付く機会が増えたのだと考えられる。また、女子 B は「作詞ノート」を「よく振り返って見てみる」と言っていたが、これは、ひとつのノートに継続して書き続けることの利点だと言える。

4.5. 男子 B と男子 C について

男子 B と男子 C⁴⁰は、それぞれ独自に、「作詞ノート」上で「ブレインストーミング」を行っていた。

男子 B は、メタルという音楽ジャンルが好きで、はじめはメタルについての記述ばかりだったが、阿部（筆者）が「メタルを好きな自分（男子 B）って何なんだろうね？」と問いかけると、そのことについて考えだした。実際には、「作詞ノート」の中心に「自分」と書き、それを丸で囲み、そこから思い付くことを広げていった。そのようにして自分とメタルとの関係を広く考察していき、最終的には、他人にどう思われようとも、自分がメタルが好きだと言うことを伝えたいという結論に至った。

男子Cは、自分が何でもおもしろいと感じてしまうということを深めようとしていた。「作詞ノート」には、男子Cが面白いと思うものがたくさん書かれており、それぞれに「なぜおもしろいのか」という考察を加えていた。授業後半では、それが発展し、「普段どおりって何？」という問いを立て、「予定通りのことなんてほとんどない！」から「すべてがおもしろい」と答えていたり、それは「みんなにとってはおもしろいことなのか？」と問いを広げたりしていた。

男子Bも男子Cも、最終的に歌にしたことは、授業のはじめには考えていなかったことである。「作詞ノート」上で広く「ブレイクストーミング」をしたことにより、自分の考えを一度反省することができ、歌の節々からその歌に込めた思いが感じられる、深みのある歌ができあがったと言える。

4.6. 男子Dについて

男子Dは他の子どもたちとは異なり、曲だけを制作した。歌づくりをする中で、曲だけで自分の思いを表現したいと考えるに至ったためである。

男子Dは、中学3年になって、受験を控えていることの影響などから、日常生活を「つまらない」「みんな変わった」と感じていた。そのため「どこか遠くへ行きたい」と「作詞ノート」に書いてきた。

男子Dと関わった篠塚が「どんなところへ行きたいのか」と訪ねると、男子Dは明確にその景色のイメージがあると答えた。男子Dはその景色の特徴を「雪が降っている」「広い」など口頭で説明したが、篠塚が具体的に理解しきれなかったため、男子Dはその景色を絵に描いてみせ、篠塚に説明し、そこで篠塚はイメージをつかむことができた。その後、男子Dと篠塚は話し合っ、その景色を思い浮かべられるような曲をつくることにした。

授業前には、このように具体的な景色のイメージから歌をつくることは想定できなかった。子どもたちの表現の多様さが理解できた場面である。

「作詞ノート」の活用に関して言えば、その場で思い浮かべた景色を絵で描くという、即興的なやりとりがみられたことには意義がある。歌をつくるということが、単純な作詞・作曲の作業のみに依存してはいないことを改めて理解することができた。また、男子Dが絵を描いたのは、Sjueの「作詞ノート」にも絵がたくさん描かれていたことに影響されたと考えることができる。実際、Sjue自身も、自分の描いた絵が作詞に影響すると話している。男子DやSjueの例から、われわれの表現は、多様な文脈からなされているということが示唆される。

5. まとめ

本授業においては、これまで述べたような場面で特に「作詞ノート」が有効に活用された。個々の事例にそくした考察は前章に譲り、ここではそれらをまとめて考察することで得られる新たな視座について述べる。

ひとつは、われわれが何かしら意図的に表現活動を行うとき、その表現活動は、個人のもつ日常の文脈に沿って行われることで、より豊かなものになるのではないかと、ということが考えられる。

「作詞ノート」が可能にしたのは、それぞれの表現に、目に見えた形で個人のもつ日常の文脈を与えることである。たとえば、女子Aは、これまで自分が書いてきた詞を「作詞ノート」上で継承することで、新たな表現へ向かうことができた。また、女子Bは、「作詞ノート」上で今の自分の気持ちを書き進めることで、自分の気持ちを確認し、新たな気持ちに気付いていくことができた。

表現活動は、そのようにそれぞれ個人の日常にそくした何らかの文脈に沿うことで豊かに行われるものなのではないだろうか。たとえば、自分の生活とは切り離されたところで、音楽の時間に作曲法を学ぶことのみを目的に作曲をしたり、国語の時間に古典を学ぶことのみを目的に俳句を書いたりする場合と、本授業のように、日頃自分が考えていることについてさらに反省を重ねていった場合とでは、作品の深みが違ってくると考えられる。たとえば、常に自分の歩みを振り返り、今の自分の気持ちを探りながら歌をつくった女子Bにとって、本授業でつくった歌の持つ価値は他者が思う以上に大きいものだろう。それは、一緒に歌をつくった「sjue」メンバーの実感でもある。

また、ふたつめとして、一緒に活動を行う表現者の表現方法を考察していくことの重要性が明らかになったと言える。本授業では、様々な作詞家・ミュージシャンの作詞方法を考察し、特にSjueの「作詞ノート」に焦点をあて、授業に取り入れることで、前述のような効果を得られた。

ともすればわれわれは、表現活動において、授業者側が何ら介入しなかったものが、子どもの真の表現だと理解しがちである。確かに、授業者の意図に沿って無理に誘導された表現は、子どもの真の表現ではないかもしれない。

しかし、表現者の表現方法を参考にし、子ども自身がこれまでとは異なる仕方で表現を行えるようになることは歓迎されるべきである。そして、表現者の表現方法をつぶさに考察することにより、「作詞ノート」のような授業に取り入れられるものを見つけ出すことができるのではないかと、という仮説を立てることができる。

以上のように、「作詞ノート」の活用によって、「作詞ノート」が自分の思いを表現するために適した教材であることが明らかになった同時に、表現活動のあり方について、新たな視座を得られることができた。

6. 今後の課題

本論では、あるミュージシャンによる歌づくりの授業における「作詞ノート」の活用から、表現活動の教育方法について考察してきたが、今後の課題としては、以下のことが挙げられる。

本研究で扱ったのは、ある特定のミュージシャンによるひとつの事例でしかない。そのため、今後は様々な事例を広く考察し、その傾向性を展望していくことが求められる。たとえば、歌をつくるときには、メロディから詞を導き出す方法や、一見意味のないように思われる言葉からイメージを膨らませていく方法など、本研究では触れていない様々な方法がある。そういった事例を幅広く考察していく必要がある。

また、表現活動の授業を捉える方法についても考察していかなければならない。本研究においては、授業を捉える方法は、筆者による授業記述のみだった。表現活動の性質上、子どもの表現は単純なアンケートや事前・事後テストなどで捉えきれぬものでは決してないが、それでは授業記述にいかにか妥当性を持たせられるのか、という問いが出てくる。この点についても今後、研究を重ねていく必要がある。

さらに、本研究で得られた知見を、表現活動の授業という場に限定することなく、様々な場面で活用していくことも課題である。なぜならば、子どもを含めわれわれは、他者との関わりの中で日常から様々な表現活動を行っていると考えられるからである。そのように根本に立ち返ることで、学校で営まれる広義の意味での表現活動は、より豊かなものとなっていこう。

1 「sjue」は「スー」と読む。

2 最初の「S」が大文字の「Sjue」は人名であり、「Sjue」は女性である。読み方は同じく「スー」である。なお、授業を行った時期は「Sjue」という名前だったので、本論では「Sjue」と表記するが、以後改名し、2008年現在は「やちこ」と名乗っている。

3 後述するが、2008年現在は、ロックバンド「sjue」のギタリストとしての活動が中心である。

4 一般には、「歌づくり」とは言わず「曲づくり」と言うことが多いが、単にメロディをつくることと混同することを避け、本研究においては、「歌づくり」とした。よって、本研究における「歌」とは、詞と曲の両方を指し、「曲」とは、メロディのみを指す。

5 代表的な実践は以下を参照のこと。阿部学『ミュージシャンによる歌づくりの授業—中学校段階における表現活動のカリキュラム開発—』（平成18年度 千葉大学大学院教育学研究科修士論文）

6 授業を実施するに至った経緯や、授業の全体像について、細部にわたって記述することは、本論の主旨ではない。それらについては、前掲『ミュージシャンによる歌づくりの授業—中学校段階における表現活動のカリキュラム開発—』に詳しい。

7 2005年11月にCDデビューしたロックバンド。ギター、ベース、ドラム、というオーソドックスなバンド・スタイルでありながら、Vo.Sjueの独特の存在感や、セッションで歌づくりをすることに起因する高い即興性から、一般に言うポップスの枠には収まらない独特の音楽性を誇っている。歌づくりには、Vo.Sjue、Gt.篠塚、Gt.阿部（筆者）、Ba.諏訪（途中から）が参加した。HP <http://sjue.web.fc2.com/>

8 はじめは3名で行っていたが、3名では子どもを十分に見て回れないと判断し、途中から4名で行った。

9 「選択国語」の時間としてはこの7時間で終了したが、子どもたちは別途、つくった歌を10月に行われた文化祭で発表している。そのための練習も行っていた。

10 この点については、前掲『ミュージシャンによる歌づくりの授業—中学校段階における表現活動のカリキュラム開発—』、「2 問題の所在」で詳しく論じた。

11 「自分の思い」が具体的に何をさすのかという点については、検討の余地がある。

12 歌づくりの活動に、表現活動としてどのような特徴があるかについては、前掲『ミュージシャンによる歌づくりの授業—中学校段階における表現活動のカリキュラム開発—』、「3.3. なぜミュージシャンによる歌づくりを行うのか」で詳しく論じた。

13 代表的な実践は以下を参照のこと。阿部学『自己表現能力を育成する授業実践開発—オリジナルソング制作の活動を通して—』（平成16年度 千葉大学教育学部教育学教室卒業論文）、阿部学「おもしろ授業 オリジナルソングで学校のプロモーションビデオをつくろう！」、『授業づくりネットワーク 11月号』学事出版、2004年

14 諸富祥彦『孤独になるためのレッスン』日本放送出版協会、2001年、P190

15 前掲『孤独になるためのレッスン』、P200

16 この「イメージの共有」という観点は、「sjue」の歌づくりの過程を考察することから導き出された。「sjue」は主にセッションで歌をつかっており、その中で、メンバーそれぞれのイメージを共有し、理解し合おうと努めることが、重要な一過程となっている。

17 筆者による電話取材（2005.11.8）でそのように語っている。

18 作詞家。「日本レコード大賞」など数多くの賞を受賞している。

19 阿久悠『書き下ろし歌謡曲』岩波新書、1997、P136

20 アメリカを代表するアーティストの一人。詩人としては「ノーベル文学賞」にノミネートされるほどである。

21 『ニューズウィーク日本版別冊 12.1 ロックこそすべ

- て』阪急コミュニケーションズ、2005、P72
- 22 川喜田二郎『発想法』中央公論新書、1967、P117～118
- 23 ロックバンド「RADIOHEAD」のボーカリスト。
- 24 RADIOHEAD『AMNESIAC』(TOCP-65800) 付録の解説から引用。同バンドによる『KID A』(TOCP-65777) に収録されている歌について述べている。解説は山崎洋一郎による。
- 25 たとえば、次のような詞がある。一部を引用する。「朝の鐘／朝の鐘／ロウソクをもう一本点して、／解放してくれ、解放してくれ／きみが／とっておけばいい」(RADIOHEAD「MORNING BELL」、前掲『KID A』収録曲、付録の対訳のまま)
- 26 前掲『KID A』(TOCP-6577) 付録の解説から引用。解説は山崎洋一郎による。
- 27 1960年代に一世を風靡した「The Beatles」のメンバー。バンド解散後はソロとしても活躍した。
- 28 『ロッキング・オン・ジャパン 1月増刊号 サイト』ロッキング・オン、2001年、P50
- 29 2005年にメジャーデビューした、若者に人気のある女性歌手。
- 30 ソニー・マガジン音楽情報サイト
<http://www.musicnet.co.jp/yui/index4.html>
- 31 筆者による電話取材(2005.11.8)の内容を要約して記している。
- 32 前掲『発想法』、P59
- 33 ジョン・レノンとYUIの例にも同様の関連があると考えられるが、引用した文献からのみでは、Sjueの例ほどはっきりと関連があると言えないため、ここではSjueの例について明示した。
- 34 前掲『発想法』、P108～109
- 35 代表的な実践は以下を参照のこと。阿部学『自己表現能力を育成する授業実践開発—オリジナルソング制作の活動を通して—』(平成16年度 千葉大学教育学部教育学教室卒業論文 未公刊)、阿部学「おもしろ授業 オリジナルソングで学校のプロモーションビデオをつくらう!」、『授業づくりネットワーク 11月号』学事出版、2004年
- 36 授業で子どもたちに配ったものは、当時Sjueが使っていたものと同じ型のものにした。A5サイズで40枚の、普通の文具店で買えるようなノートである。
- 37 ただし、そもそも歌づくりの方法を説明しなくてもよいのでは、という批判も想定される。この点については、本論の主旨ではないので、今後の課題としたい。
- 38 授業を通して、Sjueは特に女子に人気があった。それは、授業の様子や、感想用紙に直接好意的なメッセージが書かれていることから理解できる。
- 39 授業後の「sjue」メンバーによる反省会での発言。授業後は毎回反省会を行った。以降、授業を振り返る同様の発言は、すべて反省会での発言である。

40 ここで「男子Aと男子B」としないのは、前掲『ミュージシャンによる歌づくりの授業—中学校段階における表現活動のカリキュラム開発—』での表記に対応させているためである。